

# ブッククロッシング

## ～本に二度目の人生を～



長崎南山高等学校

代表者：3年 小島北斗

3年 浅野広輝 松永凌弥  
伊東誠生 下村知暉

# 1. 活動の背景

我々は空き家増加問題と若者の読書数減少を課題として探究を行っている。代表である小島の曾祖母の家が長年空き家状態となっており、幼い頃から空き家に関心があった。また、小島が中学生の頃に図書委員長を務めており、生徒の読書率の低さにも関心があった。これらのことから、この活動で1人でも多くの人々が本に興味を持つようになってもらいたいと考えたのがきっかけだ。

空き家活性化、若者の読書数減少、この二つの課題をどうにか解決したいと考えた。そのとき、幼い頃に見た働く車図鑑DVDに「移動式図書館カー」なるものがあったことを思い出した。そこで、空き家を利用して地域に根付いたミニ図書館を作ることができないかと考えた。空き店舗や空き家を利用することで、毎回トラックに本を載せて各地を回る必要がなくなり、その地域に根付いた独自の図書館が実現すると考えた。そしてこの図書館が地域の憩いの場となるのではないだろうか。

# 2. 仮説と見立て

## (1) 読書数減少について

### 【仮説】

なぜ若者は本を読まなくなっているのかという疑問に対して、仮説を立ててみることにした。私たちは、学生が読書よりも部活動や学業などに専念している生徒の方が多いと考えた。その影響から、本を読む機会が減少している仮定した。また、本で調べずとも、調べたいことはインターネットで簡単に調べることができる。そのため、本を用いて正確な情報を入手するという行為が減少しているだろう。さらに、漫画や小説などはアプリを用いて安価で読むことができるため、紙媒体の書籍を用いた読書数が減少しているのではないかと推測した。先述の二つの仮説について、文部科学省のデータに基づき調査を行い、独自に長崎南山高等学校・純心女子高等学校でアンケートを実施を行った。

### 【見立て】

文部科学省「2021年読書に関するアンケート調査」において、高校生457人を対象に読書に関するアンケート調査が実施された。調査結果によると、1ヶ月のうち本を読む冊数が0冊である割合が、全体の約半数を占めていることがわかった。(図1)

また、「1ヶ月になぜ本を一冊も読まなかったのか」という設問については、46.3%の人が「普段から本を読まないから」と回答した。(図2)

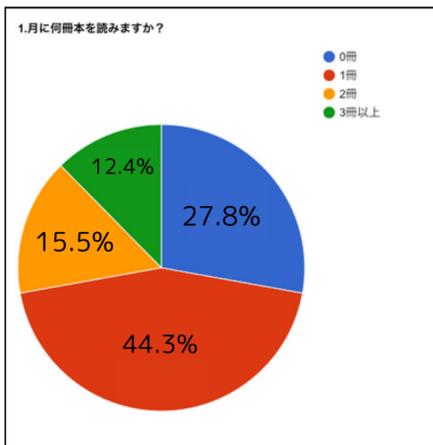
実際に私たちも、長崎南山高校と純心女子高校の生徒を対象にアンケート調査を行った。この調査では、合計で158名から回答が得られた。長崎南山高校の生徒では、「月に何冊本を読みますか?」(図3)という質問に対し、43.7%の生徒が「1冊」と回答した。また、「本を読むことは好きか」(図4)という質問に対して、51.6%の生徒が「好き」と回答した。このことから、読書すること自体は好きだが普段から読むことはしないや、好きな本に出会えないから読まないことが分かり、私たちの仮説の裏付けになっているのではないだろうか。そこで、興味のある本と出会うことができれば、読書数の減少という点に対する打開策を打ち出すことができるであろう。

	件数	割合	
		N=457	(除無回答) N=455
0冊	205	44.9	45.1
1冊	107	23.4	23.5
2冊	68	14.9	14.9
3冊	36	7.9	7.9
4冊	10	2.2	2.2
5冊	9	2.0	2.0
5~9冊	14	3.1	3.1
10冊~19冊	4	0.9	0.9
20冊以上	2	0.4	0.4
無回答	2	0.4	-
合計	457	100.0	100.0

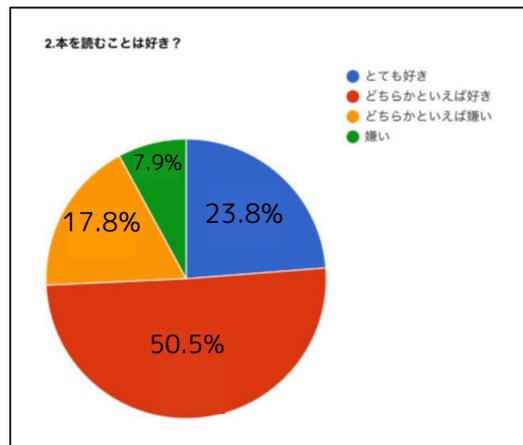
(図1) 2021年 6月10日  
「読書に関するアンケート調査について」設問3

	件数	割合	
		N=205	(除無回答) N=203
勉強で時間がなかったから	81	39.5	39.9
部活動や生徒会等で時間がなかったから	75	36.6	36.9
友達との遊びや付き合いで時間がなかったから	28	13.7	13.8
TVやインターネットを見ていて時間がなかったから	43	21.0	21.2
ゲームをしていて時間がなかったから	32	15.6	15.8
電話・メール・SNS等をしていて時間がなかったから	27	13.2	13.3
マンガ・雑誌を読んでいて時間がなかったから	32	15.6	15.8
アルバイトで時間がなかったから	5	2.4	2.5
学校の図書館(図書室)に読みたい本がないから	8	3.9	3.9
地域の図書館に読みたい本がないから	6	2.9	3.0
地域の図書館が近くにないから	5	2.4	2.5
書店が近くにないから	2	1.0	1.0
本の値段が高いから	13	6.3	6.4
どの本が面白いかわからないから	23	11.2	11.3
文字を読むのが苦手だから	22	10.7	10.8
読みたいと思う本がないから	67	32.7	33.0
他にしたいことがあったから	73	35.6	36.0
読む必要を感じなかったから	29	14.1	14.3
ふだんから本を読まないから	95	46.3	46.8
その他	2	1.0	1.0
無回答	2	1.0	-

(図2) 2021年 6月10日  
「読書に関するアンケート調査について」設問3-1



(図3) 「南山高校・純心高校に対するアンケート調査」設問1



(図4) 「南山高校・純心高校に対するアンケート調査」設問2

## (2) 空き家増加問題について

### 【仮説】

次に、なぜ空き家が増加しているのかに対して仮説を立てた。私たちは、空き家増加の背景として、地域の人口減少や高齢化があげられるのではないかと考えた。そこで、空き家増加問題について取り上げているニュース(〇月〇日放送)参考に今後の見立てを行った。

### 【見立て】

全国の空き家数は、1993年時点で448万戸であったのが、2023年時点で900万戸にまで上り、30年間で約2倍になっていることがわかった。(図5)

空き家が増加している背景として、都市部に移住したり働きに出た人が実家を売ることなく放置していることが挙げられるのではないだろうか。受け継がれることのない空き家が多数存在している。この空き家増加によって、雑草や悪臭などによる衛生環境や地域の景観の悪化、さらにはこれに起因する治安の悪化などが考えられ、空き家問題の対策は非常に重要な事案であると考えた。



(図5) 2024年 5月2日「NEWS every」報道内容

### 3. 活動の実績

#### (1) 活動の概要

この図書館は本の販売を行うことが目的ではない。「本に2度目の人生を」というテーマのもと、持ち主が不要になった本と図書館にある本同士を物々交換するブッククロッシングというシステムを採用する。また、地域活性化の観点から、近隣の店舗に交換チケットを配布し、店舗の商品を購入した人に交換チケット渡し、それをもって本と交換することができるようにする。

#### (2) 第1回 平和町商店街

##### 【経緯】

平和町商店街というのは、浦上天主堂・平和公園の近くにある小さな商店街である。山里観光市場はその中心地で、30～40年ほど前の最盛期は23店舗がひしめき合い、人がすれ違えないほどにぎわったという。しかし、現在は営業している店舗が4つにまで減少してしまっ

た。私たちは高校1年生の頃、平和町活性化コンテストという企画立案コンテストに参加した。その折に、最優秀賞こそ受賞できなかったが、審査員賞をいただいた。2年生になり、この取り組みを振り返った際、今の私たちならこのプロジェクトをより良いものにできると考えた。そして、平和町商店街の活性化に貢献できるのではないかと思い、平和町商店街振興組合の方々の協力の元、ブッククロッシングを企画するに至った。以前お茶屋さんが出店していたスペースを使用させていただき、企画を実施した。

##### 【工夫】

私たちが今回最も工夫した点としては『交換チケット』である。私たちが実施しようとしていたブッククロッシングとは、不要になった本と図書館にある本と交換するシステムである。このシステムでは、商店街の一面をお借りするというだけで、空き店舗活用としてはいいだろうが、商店街活性化というもう一つの課題の解決に至らないと考えた。そこで、商店街にある対象の店舗で買い物をすると、図書館にある本と交換することができる『交換チケット』を一緒にもらうことができる仕組みである(図6)。これにより、普段商店街で買い物をする人がブッククロッシングに興味を持つきっかけにもなり、ブッククロッシングに興味のある人が商店街で買い物をするいいきっかけになると考え、この仕組みを取り入れた。

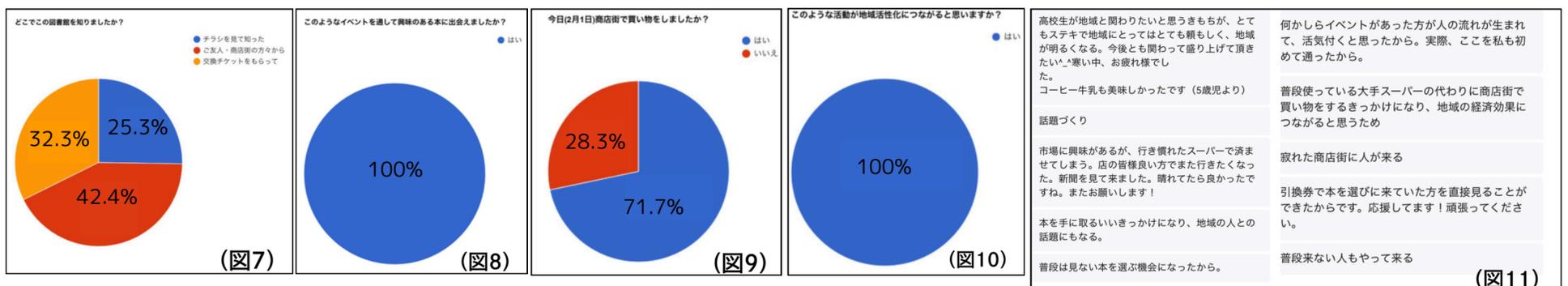
##### 【アンケート調査の結果と考察】

この活動を持続可能なものにするため、第2回の実施を検討することを目的として、実際に来場してくださった方々を対象に、アンケート調査を行った。

「どこでこの図書館について知りましたか？」(図7)という質問に対して「知人からや、交換チケットをもらって知った」と回答している方が多い。チラシやポスター等で呼びかけを行ったが、その宣伝効果よりも口コミの方が遥かに影響が大きいということが分かった。その他にも、「このイベントを通して興味のある本に出会うことは出来ましたか？」(図8)という質問に対して大半の方が「出会えた」と回答している。また、今回のイベントにおいては商店街の活性化という目的もあったが、多くの来場者が「イベント当日に商店街で買い物をした」(図9)と回答した。このことから、今回の活動が商店街活性化につながったことが示唆される。次の設問「このような活動が地域活性化につながると感じますか？」(図10)という質問に対しては、全ての方が「つながる」と回答しており、交換チケットというシステムの導入が効果的であったことが分かった。寄せられた回答の中には「商店街を使うきっかけになった」(図11)などの回答もあり、商店街活性化という意味において一定以上の効果があったのではないだろうか。



図(6)



##### 【改善点】

今回のイベントに関する改善点は、大きく分けて以下の三つが挙げられる。

一つ目、交換チケットの数が私たちの想定よりも多くの数が必要だった。実際にイベントの後半にかけて対象のお店の方から「交換チケットの追加をください」と言われた。準備していた本の冊数と来場者数の予想からチケットを準備したが、その見立てが外れていた。どのように来場者数の想定をするかという新たな課題が生まれた。また、交換チケットというシステムを導入する以上、私たちが準備していた本を渡すことで全体数が減少することになる。どのようにブッククロッシング用の本を収集するかという点は準備段階から課題感を感じていたが、今後の継続的な実施を考えている私たちにとって追求すべき課題となった。

二つ目は、どの年齢をターゲットとするかである。今回は、商店街での実施だったこともあり、子ども連れの方が買い物ついでに覗いてみたという事例が多かった。今回用意した本は大人向けのものが多く、来場者からは「絵本はありますか。」という声が多かった。実施する場所や企画内容に合わせた来場者の年齢層については、普段その場を歩きかう人などを事前リサーチし、そこに合わせた本を準備するということが必要であると感じた。また、こちらから対象年齢を提示することで、意図した客層を集めることも今後は考えられる。

三つ目は、イベントの中身についてである。今回は、イベントの実施時間を10時～15時の5時間とし、ブッククロッシングのみを行った。実際に来場者数の時間推移を振り返ると、全く来場者がいない時間帯が存在した。この問題について、前述した「どの年齢をターゲットとするか」という部分を合わせて考えると、ワークショップなどのあるタイミングをめぐって集客を行う仕掛けも効果があるのではないかと考えた。

今回、空き家活用・地域活性化という面では一定数の集客があり、効果があったと考えられる。また、読書機会の増加という目的についてもアンケート結果(図9)から、一定の効果を得られたと考えられる。よって、上記の点を改善し第2回の実施を検討することとした。

### (3) 第2回 松浦市

#### 【経緯】

私たちは、第1回の平和町商店街において得た新たな課題について振り返りを行い、第2回の実施について模索していた。その折、私たちの活動に興味を持ってくださった山口さんと松浦高校の校長である船越先生から「ぜひ松浦市でも行って見ないか？」とのお声をいただいた。山口さんは松浦市の活性化を考え、空き家活用など様々な取組を実践されている方である。松浦市は年々人口減少や住人の高齢化によって、空き家増加問題が大きな課題とされている地域である。空き家活用というテーマのもと活動している私たちは、松浦市での第2回目のブッククロッシング実現に向けて動き始めることとした。

今回は長崎南山高校から約100kmほど離れている遠方での開催となるため、現地の松浦高校の探究グループ松ナビ2班と協力して行うこととなった。そのため、集客や事前準備などについて新たな課題も生まれた。

使用した空き家は、松浦高校の探求授業で講師を務めている宮田さんが所有する「issho」という会場である。ここは元々、着物屋だった場所を空き家活用という目的で改装し、今後貸し出しを行う予定のスペースである。「issho」初の貸し出しが私たちの第2回ブッククロッシングとなった。

#### 【工夫】

第1回の平和町商店街における改善点二つ目について、企画段階から対策を講じた。今回の松浦市での第2回ブッククロッシングにおいてはワークショップを企画し、来場者が訪れる時間の目安を設けることとした。私たちの解決したい課題の一つが子どもの読書機会増加であるため、ワークショップのターゲットを児童生徒とした。そこで、企画としては「紙袋で作るブックカバー」や「オリジナルしおり作り」「本の題名を用いたビンゴ大会」を実施することにした。

私たちは、前回の商店街との相違点として、来場者が訪れる目的に注目した。前回は商店街の一角を借りて実施したため、買い物客がブッククロッシングに流れる仕組みをつくることで集客することができた。今回の松浦市では、近隣に店舗があるものの、コンビニやパチンコ店などであり、そこから集客につなげることが難しいという結論に至った。そのため、どのように集客するかという部分が大きな課題となった。そこで、前回よりもチラシ作成を早めに行い、口コミやSNSを通じて集客することとした。また、「issho」前のスペースを活用し、松浦市・長崎市それぞれの名物を販売することで、そこからブッククロッシングに興味を持ってもらう流れをつくれなかと考えた。そこで今回は松浦高校から松ドリ一焼き、長崎南山高校からは長崎市付近にある時津町の名物である時津まんじゅうと長崎市中街にある蘇州林のマファール（ヨリヨリ）の販売を企画した。

手元に不要な本が無くても気軽に足を運べるように、前回行った交換チケットのシステムも活かすことにした。今回は近隣の店舗の協力が難しかったため、事前配布するチラシに交換チケットを載せることにした(図12)。そこで、前回課題として挙げられた本の調達について考える必要が出てきた。児童生徒向けのいかにして調達するかという部分について両校で検討し、互いの高校内でまずは調達できないかということになった。そこで、全校生徒向けに企画の趣旨説明と本の提供を依頼し、約80~100冊ほどの本が集まった。また、松浦市立図書館にも協力いただき、書庫整理で不要になった本を寄贈していただいた。今回は各所から事前に本を調達することができたため、ある程度の年代や人数をカバーできるだけの冊数を準備することができた。また、企画に賛同していただいた来場者からも多くの本を寄贈していただいた。

#### 【アンケート調査の結果と考察】

今回も第1回と同様に、実際に来場してくださった方々を対象にアンケート調査を行った。今回は来場者数が非常に少なく、全体として20名ほどであった。アンケート回答数も7件にとどまっております、分析するには十分な数ではないが、ここから次回に向けた改善点を考えたい。また、前回の改善点に対する対策についてもこの結果から考察したい。

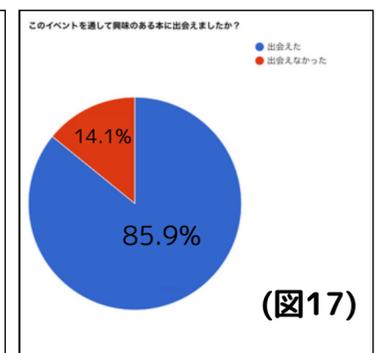
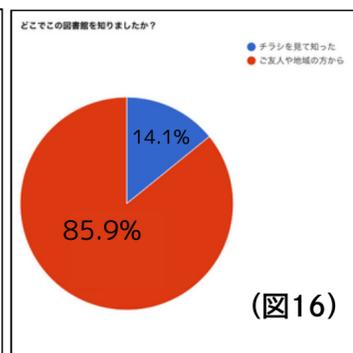
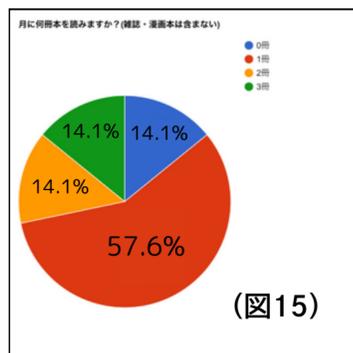
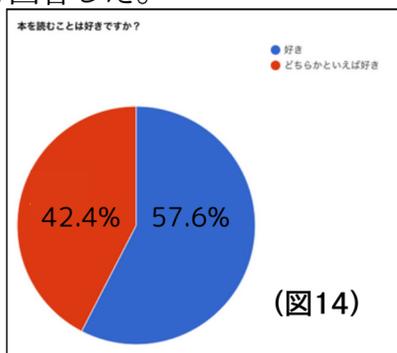
約20名の来場者の年齢層としては子連れの方が多かった。本とのかかわりをもたせたいという保護者の意向が、このイベントに足を運ぶ要因になっているのではないだろうか。前回の改善点にあげられた幼児対象の本を充実させたことで、親子とも一定の満足度があったように感じた。一方で、10代の来場者が0%であったため(図13)、小学校高学年以降の年代をどう集客するかという部分が今後の大きな課題になった。

次に、来場者全員が「本を読むことは好きですか?」という質問に対して「好き」や「どちらかといえば好き」という回答であった(図14)。ブッククロッシングに来ていただいた方は少なくとも本に興味のある人であるということが裏付けられる。私たちが課題としているのは読書機会の増加であるため、本を読むことが嫌いな人に対して本の魅力を知ってもらえるようなはたらきかけが今後は必要であると考えた。また、「月に何冊本を読みますか。」という質問に対して、半分近くの方が「1冊」と答えていることから(図15)、『本を読む』ということは好きだが、読書よりも優先したい諸事情をそれぞれが抱えているのではないかと推察した。この背景を改善するようなアプローチは個人によって大きく異なり、私たちの手が届かない部分である。今後、私たちがすべき部分としては、それぞれの諸事情よりも読書を優先したくなるようなはたらきかけができるように対策を講じなければならない。

新たな課題として浮き彫りになったのが「どこでこの図書館を知りましたか?」(図16)という質問に対する回答である。ほとんどの方が「知人から教えてもらった」と回答しており、「チラシを見てきた」という方は少なかった。遠隔地での実施において、事前の情報発信をさらに工夫しなければならないと強く感じた。「このイベントを通して興味のある本に出会えましたか?」(図17)という質問に対して半数以上の方が出会えたと回答した。



(図12) 第2回チラシ



## 【改善点】

今回のイベントに関する改善点は、大きく分けて以下の二つが挙げられる。

一つ目は、ブッククロッシング自体の注目度である。集客の目的で導入した名物などの物品販売の方に大きな注目が集まり、このイベントの本題であるブッククロッシングが薄れてしまった。実際に、会場に来ていただいた方は97名と前回とよりも多い人数だったが、ブッククロッシングを行った方は約20人ほどであった。この企画自体の趣旨が十分に伝わっていなかったと考えられる。新たな本との出会いがどれほどすばらしいのか、その良さに気づいてもらえるような周知の方法を模索したい。

二つ目は、事前の告知についてである。当日に向け、チラシと各校のSNSを用いて周知を図ったが、結果を見るとこれが十分ではなかった。遠隔地ということもあり、打ち合わせは基本的にオンラインで行い、事前告知も松浦高校に任せっきりになっていた。また、準備を早めに行ったが、最終的にチラシを配り始めたのが実施日の1週間前だったため情報発信期間が短かったことも問題であった。原因として、松浦高校の生徒との情報共有が少なかったことが考えられる。実際にチラシ作りは我々南山の生徒が行うようになっていたが、互いの認識に相違があり、打ち合わせ会議の際に松浦高校の生徒からもチラシ案が提示された。仕事の分担や情報共有が徹底できておらず、どこまでを自分たちとするのか、どこからを任せるのかという部分が不明瞭だったことが一番の問題点であったように感じた。

前回の改善点である、本の収集、ターゲットの明確化、イベント内容の充実に関しては一定の成果が見られた。前述したように、各校で本を収集したこと、市立図書館などに協力を依頼したことで、幅広い層に対応できる本が集まった。今後の活動を見据え、さらに充実させるにはどのような方々に協力を要請したらよいか引き続き検討したい。ターゲット層もワークショップを小学生程度の年代に絞って企画したため、それとほぼ同じ年齢の子どもたちが参加した。参加した子供たちは大いに楽しんでおり、本の名前を用いたビンゴ大会では、小学生が普段読まないような本も混ぜることで、新たな本との出会いも喚起されるような仕組みにした。第1回で感じた課題感に対する改善策は機能していたように感じた。今回の実施において新たに出た課題を今後の活動でどのように工夫していくか、本題である空き家活用と読書機会の増加という2点に関して、さらに有用な手段となるようブッククロッシングを実施していきたい。

## 4. 総評

### (1) この活動を通して

この活動を行う前は、「空き家問題」と言われてもあまり実感が湧かず、「そこに新しくお店を入れれば解決するだろう」といったように、単純に考えていた。また、読書に関しても、「今の時代はスマートフォン一つで何でもできるのだから、本を読まなくても大丈夫だろう」と楽観的に捉えており、学校で本を読まなければならない時間があるから読む、といった消極的な姿勢になっていたことが多くあった。

しかし、今回の活動を通して、空き家がただポツンとあるだけでは何もできず、地域の状況を考慮し周囲のお店と連携しながら、「空き家でどのようなことを実施すれば課題の解決につながるのか」を街全体で考える必要があると気づいた。また、地元でどれくらいの空き家が存在しているのか、自分たちの活動以外にどのような団体がどのような取り組みをしているのかを調べる中で、空き家に対する関心も深まっていった。さらに、読書についても、本を通じてさまざまな人とコミュニケーションを取るきっかけになるなど、本の持つ重要性を実感することができた。

このブッククロッシングという活動をする中で、空き家を貸していただいた方々以外にも大変多くの人々の支えがあったと改めて実感した。

第一回目の開催に先立ち、大学生時代に空き店舗を活用した商店街活性化活動に取り組まれていた県内の市議会議員の方に、質疑応答や計画に対するフィードバックをいただいた。商店街の方々がどのような思いで働いているのか、どのような思いで商店街活性化に取り組んでいるのかを理解した上で、イベントに取り組むべきだとご助言いただいた。

そのため、商店街の方々にどのような思いで働いているのか、どのような思いで商店街活性化活動を行っているのかを聞いた。

また、本を置くだけでなく、高校生によるトークイベントやビブリオバトルなど、高校生主体で行うイベントを同時並行的に開催してはどうかというアドバイスをいただいた。

そのため、第二回目の図書館イベントにてビンゴ大会やしおり作り、ブックカバー作りなどを行った。

呼び込みたい年齢層やターゲット層を明確にし、その方々が心地よく過ごせる空間を作るにはどうすれば良いかなど、具体的なアドバイスをいただいた。

第一回目は、ターゲットを絞らずに行ったが、第二回目は、子連れの家族をターゲットにして開催した。

さらに、1月26日に開催されたマイプロジェクトアワード長崎サミットに参加し、の審査員の方から、商店街の方々とビジネス面以外の繋がりを持つことも重要であるとのこと指摘をいただき、単発的な取り組みではなく継続的にやっていくことが大切であるというアドバイスもいただいた。

このプロジェクトを継続的に行うために情報発信を日々行い、協力していただける方々を集め、コミュニティの輪を広げていきたいと考えている。

### (2) 今後の展望

今後の目標としましては、プロジェクト終了後もその地域で活動が継続されるよう、またはそこから派生した様々なプロジェクトが生まれるようなハブ的な役割を担うプロジェクトに構築していきたいと考えている。

加えて、この活動を通して、その地域の魅力をより一層発していきたいと考えている。また、プロジェクトをご利用いただいた方の読書数を増加させたいと考えており、普段読書をされない方も、このプロジェクトを通して読書習慣を身につけていただければ幸いである。

今後は、長崎県内で探究活動を行なっている活動家の方々と協力し、コミュニティの輪を広げ、目標の明確化、計画の作成、チームの構築、コミュニケーションの徹底、リスク管理、継続的な改善に取り組むことで、より一層プロジェクトを強化し、第三回の開催を目指したいと考えている。

そして、この活動が長崎県全体に広がり、私達以外にも空き家問題や本に関わる地域活性化活動を行う方を、一人でも増やしていく活動を継続していく。